

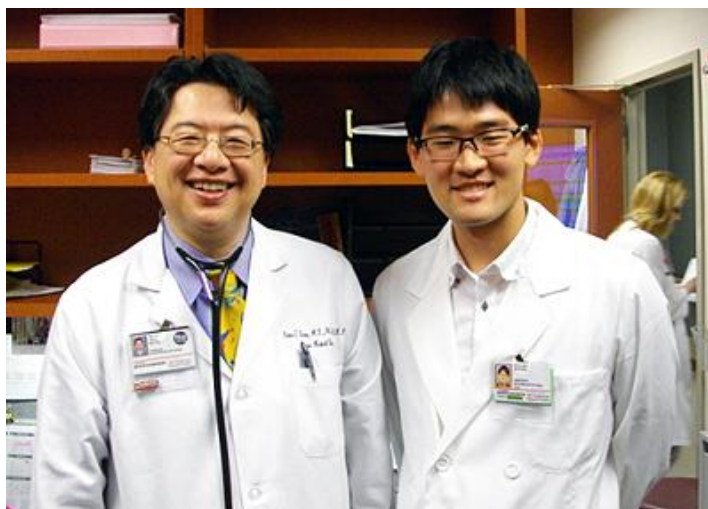
特別レポート◆◇ 日本の医学生が見た MD アンダーソン

東京大学医学部医学科 5年(M3)

清水 啓介

この度、私は 2014 年 1 月 13 日から 31 日までの 3 週間、上野直人先生のご厚意のもと、MD Anderson Cancer Center（以下 MDA と呼ぶ）の Department of Breast Medical Oncology (BMO) と Department of Leukemia を見学させていただく機会がありましたので、ここに報告させていただきます。

昨年の 5 月に虎の門病院の臨床腫瘍科を見学し、その際、部長の高野利実先生、J-TOP チューターでもある三浦裕司先生に、上野先生を紹介していただいたのがきっかけで、MDA を見学させていただくことになりました。お三方には感謝申し上げます。



上野直人先生(左)と筆者。MD Anderson Cancer Center にて撮影

3つの見学の目標

今回見学するに当たり、(1) 本場の Oncology を肌で感じることに、(2) Mentorship 制度について考えることに、(3) 乳がんの薬物療法を学ぶことに、と自分なりに目標を設定して臨みました。勿論それに付随して、英語を上達させたい、現地で働く方のお話を聞いてみたい、観光を通して文化を学びたい、などの目的もありました。

日本の外来との違い

外来を見学して印象に残った日本との違いは、まず日本では通常医師が待っている部屋に患者さんが入っていくという形ですが、MDA では患者さんが待っている部屋に医師が出向くという形であったことです。脱衣の時間が省けることもさることながら、患者さんのいるスペースに医師がお邪魔するという点で、患者さんが委縮せず話しやすい雰囲気を作ることができるのかなと思いました。また患者さんの診察に際しては、上野先生はじめどの先生も魅力的な診察をされていました。日本のような、医師が電子カルテを見ながら手順通りの質問をしていく、といったような印象はありませんでした。その違いは、一つに診察にかけることができる時間の違いもあるでしょうし、教育の違いもあるのかなと思います。

日本で問診といえば、「推論」・「推理」といった側面が強調され、答えに早くたどり着くのがよし、みたいな部分がありますが、アメリカの医学生は学生のうちから Free clinic のような場所で実践を積み、実際の患者さんに触れていると聞いています。むしろ、何を伝えるかを推理できるのは当たり前で、それをどのように伝えるかを学生のうちから学んでいるということなのかと思いました。

乳がんに興味を持った理由

そもそも私が乳がんに興味を持ったのは、大学の実習の一環でがんの在宅医療を一週間見学した経験にあります。40代の末期の乳がん患者さんで月曜日に自宅をお邪魔したときにはまだまだ元気な様子だったのに、水曜日に突然亡くなり死亡診断に同行したときには、衝撃を受けました。あたふたして涙を流している看護師さん、何も分からずキョトンとしている4歳の娘さん、単身赴任でまだ帰ってこないご主人、そしてどんな表情をすればいいのか分からない自分。初めて身近にがんという病そして死の現場に対峙し、自分には何ができるのか考えた時でした。

アメリカの患者さんと医師の対応について

アメリカの患者さんの印象としては、その国民性ゆえ、自分の意見や感情をありのままに表出する方が多かったようでした。結果が良くなっていないと聞いて泣き出してしまう患者さんもいれば、末期であるにもかかわらずとてもポジティブな患者さんもおりました。また、総じて医学的な知識が豊富で、自分の健康について情報を収集ししっかりと判断しようと努力されている方が多かったように思いました。中には質問したい項目を紙に列挙したり、ジャーナルの論文をコピーしてくる患者さんもいたのですが、そのような患者さんに対しても上野先生はじめMDAの先生方は一つ一つ丁寧に質問に答えており、そのようなドクターに巡り合えた患者さんは安心して治療に臨めることと思います。

一方、作業スペースでは多職種が患者さんについて活発な議論を行っており、教授とフェローが対等な関係であるかのようにお互いを尊重し議論している姿は、見ていてすがすがしいものがありました。患者さんに関し、不明な点があれば問診の後すぐ local oncologist に電話し、local oncologist も聞かれた患者さんについてきちんと把握しているのは、がんセンターの専門的な医師と地元の local oncologist との連携が取れているからなのだと感じました。

Mentorship 制度について

付け加え程度で申し訳ないのですが、Mentorship 制度については自分の中ではまだ良く分からず、答えがでていません。Mentor と聞くと、大学に入ったころから、「自分も God Hands と呼ばれている脳外科の先生のような脳外科医になりたい」と言い続け、今もなおその目標を持っている同級生のことを想起するのですが、そのような偶像崇拜のようなものをメンターというのか。それとも医師として価値観を同じくする人、自分の進路を相談できる人がメンターであるのか。今後もなお、たくさんの腫瘍内科の先生方の姿を拝見する中で、考えてゆければと思っています。

謝辞

最後に、今回のような素晴らしい機会を与えてくださった MDA の上野先生、事務の方をはじめとする皆様、虎の門病院臨床腫瘍科の高野先生・三浦先生には、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

(2014 年 2 月執筆)